

歌舞伎町のマリア様

脚本・演出 藤谷 清六

スタッフ

作曲 / 佐田 和弘 舞台装置 / 蘭 光 照明 / 飯野 洋光 音響 / 島津 久美子 メイク / 田中 来実
 ヘアメイク / 小林 淑子 衣装 / HIRO CHIAKI ロボットの衣装 / 笹本 正明 舞台監督 / 関根 涼子
 制作 / 土井 マチ子 松永 博美 プロデューサー / 山本 眞樹

あらすじ

東都二部リーグ所属のある大学野球部の3人が卒業後それぞれの道へと進んで37年、目下59歳。「来年は俺たちも還暦だ。」とつぶやきながら、焼き鳥、馬刺を着に（通称かめちゃん）の自宅でささやかな宴会を開きます。還暦を迎えるおじさんたちが、19～20歳の時代に逆戻り、言葉使いもすっかり昔に戻り、まったくの無礼講、3人で追いかけた彼女の話に花が咲きます。やはりお酒の力ですかねえ・・・？ だが、かめちゃん宅にある一基のロボットが予期せぬ騒動を起こします。久しぶりに笑える藤谷ワールド。はて、さて？ どうなることやら……。

劇作家・藤谷清六さんのこと

私は藤谷さんの作品を4本演出させて頂きました。その最初の作品は、チューホフのひとり芝居「煙草の害について」を現在の甲府に置き換えた作品で、藤谷作品の初期の作品だと思います。その時の事ですが、藤谷さんは作品の意図や狙いを私に熱っぽく語りました。そのお喋りは上手く面白かった記憶があります。その独特な語り口は衰えず、今も健在のようです。

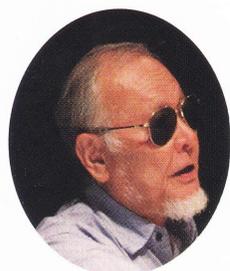
もう一つ、びっくりしたことがありました。それは台本が出来上がり、稽古が進み出したのに、ポツリポツリと次の作品のことを話すのです。多分、今もこの姿勢は変わってないと推察します。多分、「歌舞伎町のマリア様」の演出をしながら、次回作の構想はまとも台本を書き始めているのではと思いますが……。こんな器用な芸当のできる人を私は見たことがありません。

また「藤谷清六とは、とんでもない人だ」と思いながらも、人は藤谷さんの虜になってゆく。私もその一人ですが。

劇作家・藤谷清六さんはお喋りを重ねながら作品を捻り出す人だと思います。そして料理に例えて云えば、和風とか中華とか、フレンチとか、イタリアンとかいった決まった形に収まらない料理を作る劇作家。自分のスタイルを確立し、そのなかを泳ぎ劇作するのなら楽だろうが。それができない劇作家。それは時代の空気を素早く察知し、軽妙なジャブを飛ばしながら、鋭い視線で「今」を見つめて「今」を抉り出す作家だからでしょう。劇作のスタイルなど藤谷清六さんには必要ないのでしょうか。劇作家・藤谷清六さんの劇作スタイルは変幻自在にして軽やかだ。藤谷さんの芝居を見終えて感ずるのは、心地よい爽快感が残るということです。この爽快感が藤谷演劇の魅力のひとつでしょう。



シアターガイア主宰
 演出家
 水田 拓



プロデューサー
 山本眞樹

キャスティング

いつもいつもキャスティングには半年かかります。スケジュールが合わない、家に病人がいる、子供の〇〇、主人の〇〇、会社の移動、転勤、当日旅行、自分の劇団が優先(当然)他の劇団に出演などなど理由は枚挙に暇がありません。でも辛抱強く6ヶ月捜していると必ず新しい道が拓けます。この度の「歌舞伎町のマリア様」もまさにその通りです。全く初めての新人が何人が参加し

ています。素直な心で熱心に稽古をしています。10月のお芝居なのに2月から稽古を続けています。こんなことは私も初めての経験です。還暦前後のオジサンたちが、無遅刻無欠勤で真剣に稽古している風景そのものが喜劇的です。発声の水田先生に時々お越し頂き、お腹から声を出す基礎を学んでいます。経験がないだけに、素直で頭でっかちにならずに新鮮で感動的な稽古場です。ぜひ秋のひとつき、甲府桜座へお越し下さい。

腐れ縁

藤谷清六さんのもと、脚本のタイピングのお仕事をさせて頂き早12年。二人三脚でここまで歩んで参りました。公演の際には制作という大役をお受けして、その費用はいつも私の想像を遙かに超える金額です。関係者のチケット販売などのご努力により赤字を最小限に抑えることが私の役割です。今回は第18回



制作
 松永博美

「歌舞伎町のマリア様」という野球を題材にしたお芝居です。私は大の野球ファンということから、いつもより興味が沸き、本読みから稽古に参加して来ました。役者は全員アマチュア。笑いの絶えない楽しい稽古場でした。この作品は、誰もが楽しめる面白いものに仕上がっています。昔を思い出し、馬鹿なことばかり言う酔っ払いのおじさんたちの滑稽さと、ひとりの女性に対する学生たちの憧れ、皆さんもそんな青春時代を過ごしてきたことでしょう。そんな昔を思い出しながら楽しんで頂きたいと思います。甲府桜座でお待ちしております。